ニュースレター
熊本乃地名

発行者 熊本地名研究会
会長 木﨑康弘

題字 松野国策 書

阿蘇の噴火、熊本平野を形成

地質で判る環境の変化 物語で伝えた先人たち

長谷 元熊大教授が講演

熊本地名研究会の12月例会は15日午後1時30分から熊本市のパレアで開き、「人類紀における火山活動と堆積物から熊本地域の自然環境変遷を探る」と題して元熊本大学大学院自然科学研究科教授の長谷義隆氏が講演した。長谷氏は民話に出てくる地名と地質の関係から説き起こし、「火の国・水の国」といわれる熊本の自然環境の成り立ちと変遷について、堆積物の分析によって明らかにする過程を、自ら作成したイラストや写真・図を使って詳しく説明した。講演の後、活発な質疑応答を行い、今年度最後の例会を締めくくった。この日の参加者は10人だった。

講演する長谷義隆氏

長谷氏の講演要旨は次の通り。【報告者・藤野】

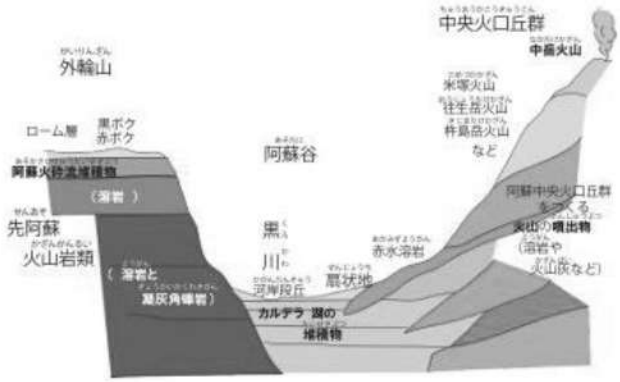
タイトルにいう人類紀とは、恐竜絶滅後の新生代の第四紀の中で、特に人類が活躍する時代を「人類紀」と呼ぼう、として使っている地質時代区分。この時代にあって熊本は、阿蘇の火山活動と非常にかかわりが深く、特徴的で火の国でもあり水の国でもある根拠になっている。ありがたいことに、このことにより観光面でも、また生活用水の面でも非常に恵まれている。では、熊本地域で自然環境がどう変わってきたのか見てみよう。

まず、環境の変化を地名と絡めて表現した物語が残されているので紹介したい。飯田山と金峰山の背比べの話があるが、今見ても明らかに両者の高さが異なるのに、なぜ背比べをしたか。教育論としも読めるが、地質学的には本当の話だ。もともとは飯田山の方が高かったのだが、金峰山は火山のためどんどん成長して、とうとう飯田山を追い越した。そのことを昔の人は物語にした、とも言える。また、山鹿市に不動岩という巨大な岩山がある。その西に彦岳があって、その間に首石という地名にもなっている岩が鎮座している。昔、不動岩と彦岳が力比べの綱引きをして、負けた不動岩の首が飛び、その首が転がった所だという話だ。かなり距離は離れているが、地質学的に見ると不動岩と首石は同じ岩石で、昔の人はこのことを知っていて名前を付けたのだと思う。このように地名と地質が密接に関係しているところがある。

熊本市内を流れる健軍川には大きな石がゴロゴロしているのを見かける。また、東部の託麻台地でも直径が2㍍もある岩が出てくることがある（託麻砂礫層）。これは健磐龍命が阿蘇外輪山を蹴破ったという伝説を裏付けるものだ。熊本地震の時、蹴破り伝説がある立野で断層が動いたのもそれで、過去の地震活動で大規模な土石流が起こり、江津湖から鯰伝説がある嘉島町鯰付近まで到達したと考えられる。

熊本平野の地質を調べると、盆地状になった所に堆積物がたまっている。これは過去、阿蘇1～4と呼ばれる巨大噴火による火砕流の堆積物だ。その堆積物の上に所々顔を出しているのが託麻三山であり立田山だ。熊本市東部の地質断面図を見ると、

（2ページに続く）



阿蘇谷西部の断面図。カルデラ底部は昔の湖の堆積物

地名研究会 告知板

2月 行事日程

✣新年度総会

総会および会長講話
「免田の本目（もとめ）について」（木﨑康弘会長）
2月15日(日)午後1時30分 パレア会議室6

✣勉強会 テキスト「地名の研究」柳田國男著

2月28日(土) 午後1時30分～ パレア会議室5

＊地名研ブログでも会の活動や関連ニュースを発信中